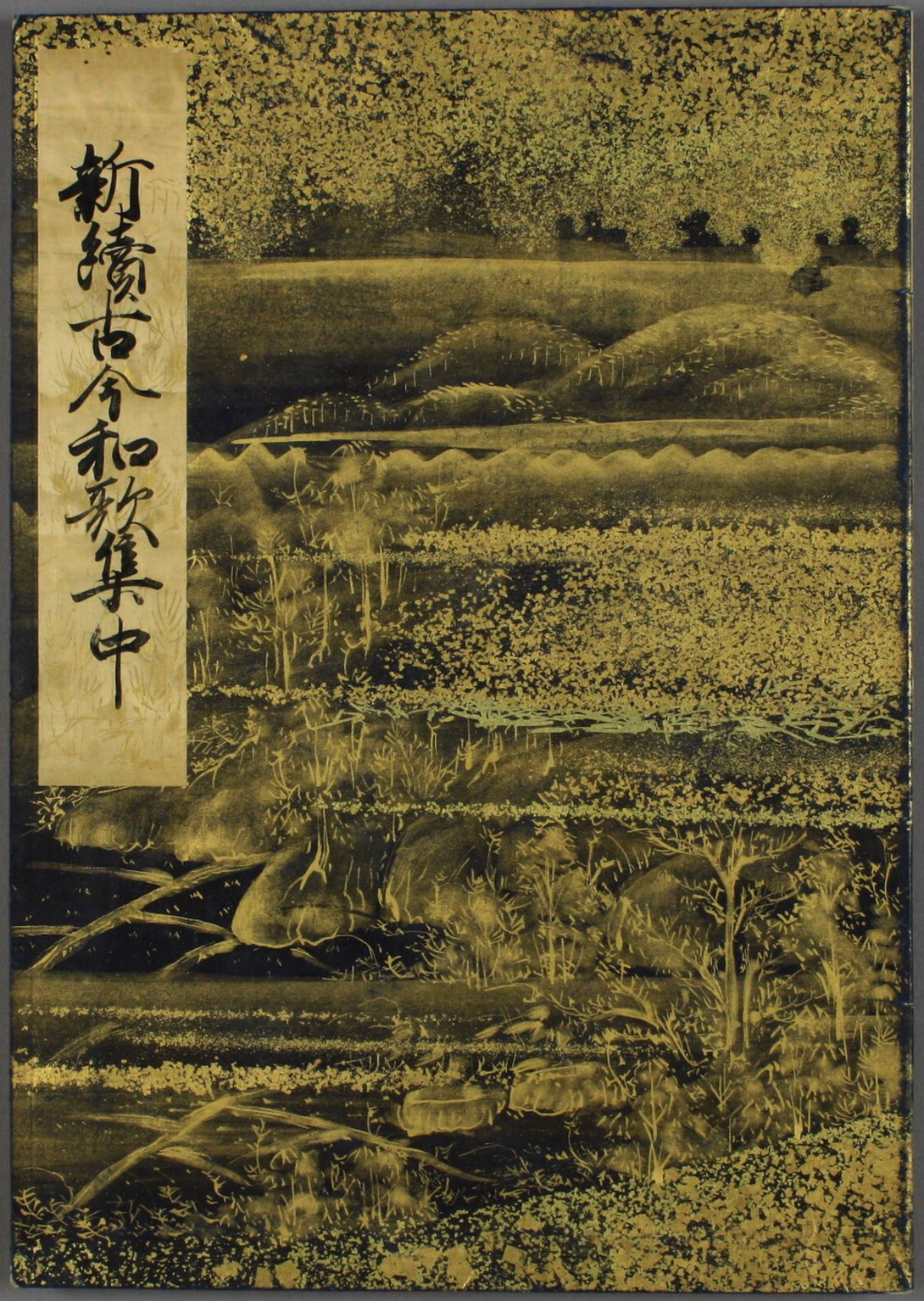
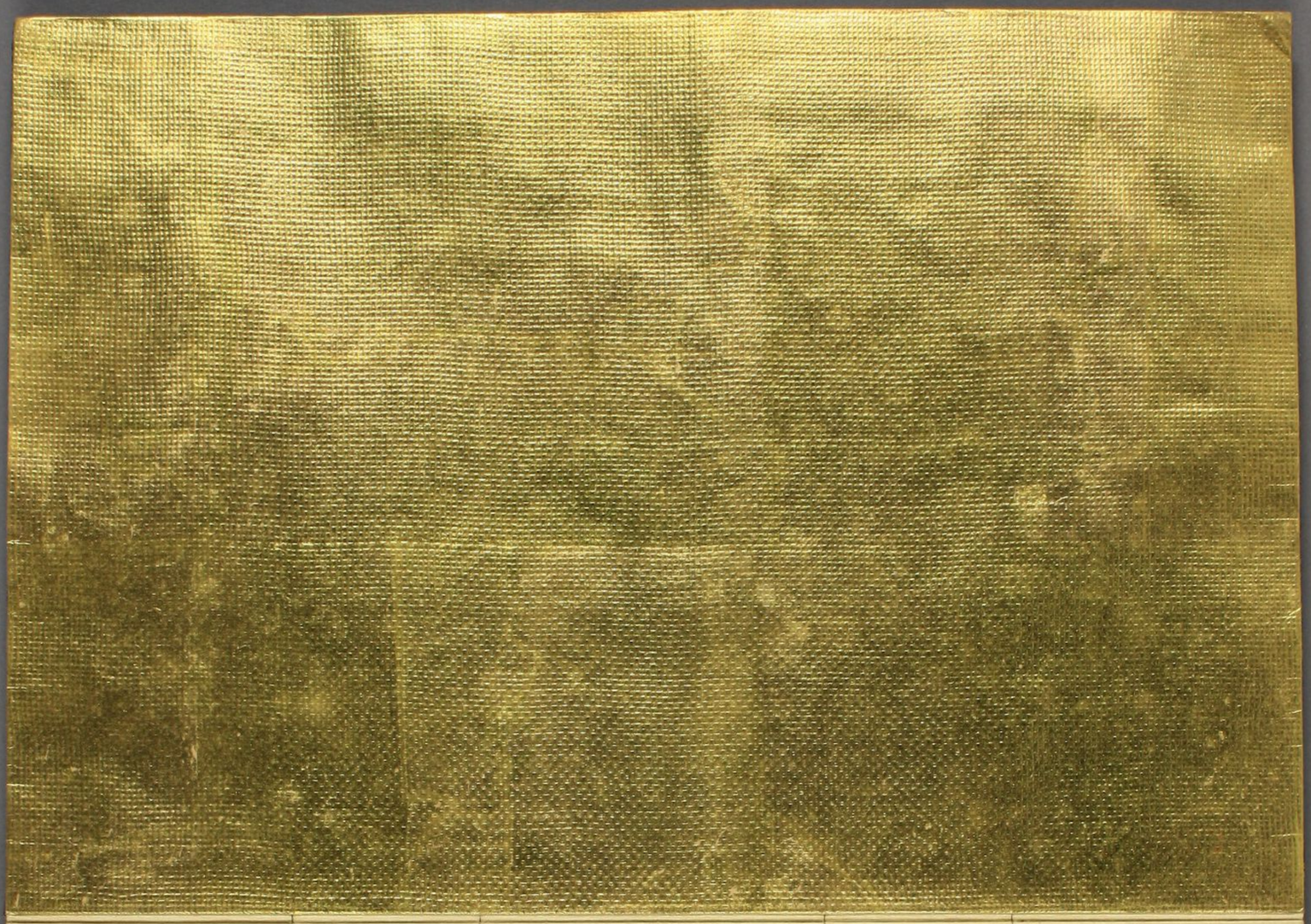
新續古今和歌集中





新續古今和歌集卷第七

賀歌

建久二年三月和歌一百首春松契齢

とこしへとちとせしはこよ海を引

後鳥羽院御製

春

わたつみ神ちはやぶる松乃色を代々に伝へ

文治六年女御入内屏風の歌の内

くらいとこつくして人乃家ゆゑ

前中納言定家

星わかぬ光をそへてさかりふる宿を飾てさかりふる

従一位倫子七十賀乃屏風乃

参議雅親

あしたづ乃ねぐらの松乃ときわ木乃

色ましらす

源順

いそのかみ八重咲とのへ乃松乃

はつはなを前関白左大臣百寺に

祝乃ことを

後法成寺乃大臣

位高き松乃昔乃ゆかりなれ

明徳元年三月内裏にて松契万歳

色とそ千代乃ゆかりなるらん

みなりそふ大内山の松葉かやと万代乃春はしるらむ

後小松院御製

雅中納言雅縁

元つねあるそふ松はとこしへにいろむとしらぬ万代の春

寛治元年十一月為賀殿にて松浦潟

とふらとをとうせしけるに

京極前関白大臣

ちとせへぬむらの松のいとしくのこれるかゆ新しき

永享九年十月たたの殿より行幸ありて

松亀映池といへるところとうせしに次より後

拾遺

今上御製

新しき汀の雲は雪ふかし八重とうる池乃さて沼

和歌所にて松契多春といふ題をみ給

しふ

雅中納言雅世

いく春を松のとしへぬ玉松はよろのとそへて松の緑

後己心院関白おなたたの家にて庭松春久

とうふらを

瑞雲院殿御たたの

庭入面に木あるに松のふるきをいく春経ぬ

元徳二年中殿にて花契万春といへることを

うせられける時

前大納言為定

九重の六月ふるよりもなほ思ひ出でてとそ思

建保四年四月内裏に歌合り

菖蒲内侍

菖蒲やたゆまぬ人の袖にかけて

奥治六年中殿にて菖蒲多き歌とゆへ

とうせしかるよりなを引けり

後光厳院御製

咲匂ふ雲井の桜ちりぬとも雲の上の春の色は

同宴に席あてまつりて

坂福光園橋殿前左殿官

つ[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]春の[illegible]

友原為邦朝臣

八重咲の桜の花の[illegible]

藤原懐風

わ[illegible]

建久元年四月立后の時ふ[illegible]

宜秋門院丹後

咲そめし[illegible]

平忠盛

康暦二年三月内裏にて人々花を題
とりてよめる　　通陽門院

神ふるとていく春をへぬ咲ぬれば松もあまつ宮の御
天長四〇殿人〇百首合ふ　　よみ人不知

天つ雲のなかれの月影のみ行末をすめる空の
建保六年中殿内大臣家百首　　前内大臣

うせにけるか　　光明峯寺入道前摂政太政
秋の池の月は独をいくそ代の光を形のうつみとなん

前二位家隆

嘉安四年九月十三夜池月添光
題　　思院入道前実右大臣

とりよせて
わが宮の光をつゝみ第代と月ふまをせてすめる池の
前中納言基隆

月影のうつぬ底なしの池のよもすがらこそ
お中納言為忠

第をもしなしの代とも池水の玉とみゝ月ふ
祝の心を　　僧正宋縁

雲ぬけてや雲ぬけて月は照まさるらん

永徳六年殿上根合

権中納言経家

あまたしらめる月はやうをも百代をめる雲はよそに

後小松院御製

うつりかはりまつりはつる祝言を

前大僧正満済

あひよりて雲と月とあらそふをうつりかはるは世をそなれる

東三條院宰相賀の屏風に人の家に書ふ

つきしらぬ

源道済

行の上ふる白雪をうつして武いくまを猶まそ有ける

弘安八年三月西園寺に行幸あり奇

従一位貞子に九十賀行はせける時

竹林院入道前太政大臣

いとへの行を掃なる庭にまたつもるひあるこの数

知足院入道前関白左大臣に

けふ時つくりあるふ行をして行ふ

康資王母

月よりつくりをふ方代をうつして世ふ我家よりあそまつふ

左宰大武國章に

むませく行けるふ

清水に参りまして給はるせ給ひける所

清原元輔

住の江の濱の玉藻に昔ふりていまは名のみ枯るとぞ見へ

西治二年百首歌たてまつりける時

式子内親王

君ゐる代いくちよ経ぬ河竹の岩ねを苔の生しるまで

新しき

わが君の千世ぬ松とぞ思ふ

大蔵卿有家

坂小松花はとぞ思ふ

庭松契久

いくとせ仕へ来ぬ

成恩寺関白前太政大臣

福照院実白太政大臣

松のみ緑やはりて玉葉の庭の雪の数とぞ見

なくてあふ松の齢いかばかりぞ雲の庭よりとぞ思ふ

坂今出河おとゝ

いく代を限いくとせ経ぬ庭の松

指大納言為平

陸奥みちのくの松よりたてまつりける武士をこえん志の

新しき

大納言経信

大井川久しきとこの新しき亀の松山雲そ志るしん

人の子むませ侍ける七夜によめる
清原元輔
ちとせとは松と亀とにまかせてはやと万代はいはんとそ思はん
永承六年殿上根合に
中納言資綱
春日山枝はしそむる松のことく君か千世は数よそ有ける
覧しらす　前大僧正慈鎮
君の代にてらしける住吉の松吹風は末もとをらし
堀河院御時百首奉りける時　祝
のんと　中納言国信

松陰にかくれせる住吉の久しき世とは君そみるへき
日吉社によみて奉りける歌の中に為と
按察使公保
陰しける桐の梢によるむ鳳数まちいて八千代みるらし
元亨三年七月亀山殿にて人々題をさ
くりて歌つかうまつりけるに寄鶴
祝と　惟宗光吉朝臣
か河やみゆきの跡をまてとや千世とそ契る鶴の毛衣
応永廿六年三月仙洞にて鶴別棚とふ
ことを講せられけるに　後宏院摂政大臣

我宮の御はらくもむもあつやちとせの数とあつて行末

末をかけ千代の友とや我宮よりあれて御のあつもまもん

権大納言実秋

ちゝなる御乃あつもよろこをとこやまの若代乃ゝ

百そ出ち中に

按小松院御製

むりの田乃いろ美河の川乃ふもむてふあつ月といつましき

千五百番ゝ合ふ　惟明親王

千川乃ゝもむ乃貫川の志ゝ乃ゝ行末まゝ乃ゝ代の数か

醍醐入道左大臣

ゝゝう河ゝ乃ゝ志ゝ乃ゝ入ゝて行末をゝ宮乃ゝ

正治二年百ゝ乃ゝ乃ゝ月ゝ乃ゝ

亟秋の院御歌

神風やみすゝ河の底ゝ乃ゝ松ゝ志ゝ宮乃ゝ

同ゝ石清乃ゝ若宮ゝ合ゝ

泰綱雅經

宮乃ゝ為ゝ乃ゝ石清乃ゝ乃ゝ世乃ゝ新やゝ

宵日祝ゝ

源持賢

物日乃ゝ新ゝ代ゝ乃ゝ宮ゝ乃ゝ松乃ゝ乃ゝ

貞和二年百ゑ齊ゑてまつりけるふ

前中納言雅孝

あはれなるこのゝちなる世をぬよりをしへくるやうにかな

同年十一月風雅集竟宴をこなはれる

時ゝまつりける　後山階太内大臣

我元ゆみをもる玉の光りをそなへて百ゑ照さん

太内大納言公泰

おなじくまつる和哥浦を新して玉の数を

延文元年六月内裏にて人ゝ二首ゝ

まつりける時宮ゝ道祝言とゝふことを

民部卿為冬

和哥乃浦よりあつめそめしく玉の数のあるかぎりを先ぞゝん

麻苑院入道前太政大臣家にて二首ゝ

ゝみ侍けるふたなりんを

ゆけ過入る前太政大臣

乃なかのゝをみけ玉ゝとあるかぎりなれ世ふ

文保百ゑ二首ふ　前中納言実任

ゝ月しかあまつ日ゝさしかゝりて昔ふる世ゝみけ

永和百ゑ二首ゝてまつりける時

権大納言為遠

末をくみすれば家流のたちひろまりぬるを
百年ばかりをへてまたりしき竹
たた大臣
元々今うゑぬるを契りにて竹のうへおれ第代乃竹
ゆ　　指大納言長家
池のふかうを新乃りの友は長さ世まをすまんとそ家
たた大臣家うて池水久流とふ
源満政
万代といそねとめうるふ風まて志ろうてはあり庭の池乃
寛治元年大嘗会悠紀方屏風よ写歌

前中納言匡房

我宮の宮代乃松ゝを五月雨乃ふる歌の村乃ゆ乃
仁治二年大嘗会悠紀方屏風
お泰綱乃長
春風乃松をゝ乃ひくゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
永仁六年大嘗会悠紀方屏風よ新垣
宣　　権大納言俊光
白雲乃ゆふりゝ乃ゝ神まつる卯月乃ゝ乃ゝ
暦応元年大嘗会主基方楠春可
正二位澄敬

萬代のためしにそひく田上や秋のかりほにかけひく稲

永和元年大嘗会主基方屏風備中
国松山　　権大納言忠光
十かへりの花咲ぬらし松山の梢とちきるつるの
志ら宮

新續古今和歌集巻第八
釋教哥
一乗の法をたもつ人のみそ三世乃佛師とハなりける
此哥ハ一条院御時上総介時重といふも
の国よりのほりて千部法花經をよませ
侍けるに結縁の為に日吉十禅師乃示
給けるとなん
梅乃木のもとなる枝に鳥の鳴て法花經とさへつる
これハまかき女の清水に百日籠りて
ふかくいのりける夜の夢に観音のしめせ

[illegible]

一色一香無非中道の心と　前権大僧都祐性

[illegible]

文永二乙丑河殿にて彩とさしてて七首
首をかきつらねける中に　光明院お内大臣

世とともに[illegible]　法花経序品我見燈明佛
[illegible]　前大僧正慈鎮

[illegible]

同品の心と　権中納言雅縁

今そとはいかなる法の花なれは[illegible]ありけるのそと
[illegible]　百秋門院

[illegible]
見解のありけるをあらはしけり　佛国禅師

[illegible]
宥[illegible]　[illegible]人[illegible]教の心と

重源法師

いとのみふるき様にとしにおもしろくそそろふ
彩しらす　　前大僧正慈澄

雲の雲はむらくと松の戸をとはんとすれはあるかみ
瞻西上人は事をなしをはりぬれはさ
けはなちてとそくをもとりもちふひとへとて
うすきて　　神祇伯顕仲

高野のはるかなるをはるかに遠きをもとめ
方便品　　前東宮学士

蓮こそ仏法の花乃色なるをもとめんとてはるかに

舎利舎をこなしをはりぬるよ蓮と
後京極摂政前太政大臣
蓮とは蓮花部よりいとをわしをはりぬるよりもわれ
立信上人のりとをはりぬるよりはなみのうちをはり
そなはりぬるよりはなみのうちをはりぬるよりはなみ
はなはなはなの契をはりぬるとをはりぬるとして
　　左衛門入道前内大臣

消ぬるさ命と露のうちをはりぬるよりはなはなはなの
建保七年三月の二日の夜の夢殿にて撰定合
　　後鳥羽院御製

神のよりてふかせ給ひ四海やすらかなる玉もとめん

中納言為房卿忌日結縁経供養し

けるに無量義経憲行所と

惟宗光吉朝臣

ふる雨を新みやらるるみなへて水たる月の光なけれ

法華経

いつまてかゆきふるの雨とはしらしの月も新とうえん

西法百首うちうたてさとりけるふ

文治

ふるうのやうとそれ数ならぬ○よ五月の月

法之位為理

定めゆきふるその浮雲にいまはうすき五月の月

同思一心歌見仏

藤原高範

入月とふるの雨とはしらしひ照とて新みてはま

鑽波乃若道寺うそうみ行けり

俊正宗綱

高野山その嶺と奥をきてこそ月もまれ

大教方丈中に

清浦朝臣

月入初日はまてれ中空ときよ雨とふ人を出さ

拾遺抄のこと　寂蓮法師

なにはえの波の玉やこの世をば
白河殿七百首の中より維摩会のよき世を
しのぶ

補遺抄御製

補遺抄に
元亨三年七月毒山殿にて人〻に題をさぐり
て七百首をよませられけるに不統に
衆過飛鳥山のこと

権僧正道祐

ふきあつめたりすなる吹風に雲の梢を
はらふなるかな

前権僧正玄円

正治百首のうちに
山道

秦宗雅

みなれぬる心のそこにしられけり雲ふきはらふ
庫の東方のこと

お大僧正慈鎮

昔をしたやふるきみなもの
人〻うせ堂そ勅学会をとなひけり

不空羂索の乃至遠見衆必當作佛

日本入前涼山　藤原仲実朝臣

鳥乃ねも聞えぬ山にきこえけれたゝのたハ程きこえす

如是縁乃心を　藤原盛徳

むくひある身とはしりてもやみ路とのかみはあまくに世をすくす覧

弘長百首に　中納言為家

いかにしてさとる法乃名をとへは迷ひなからハ知らぬ人なき

瑞雲院贈太政大臣遠忌に法華経供養せられ

人あまたにすゝめ崇賢門院もよほし給ひ

けるに薬草喩品のこゝろを

入道一品親王永助

とふゝに三乃車ハありけれとひとつたにやのりはあるらん

浄土の法文をこゝろさしけるに嵯峨の奥

に往生院といふ寺ハあるよし人の申けれはよ

ませ給ひける　後小松院御製

みな人はねかひてむまるやとりこそ浮世ハさかの奥に有けれ

三心具足乃念仏を

後嵯峨院御製

こゝろをハつとめはとも一すちにまことにたのみぬるかな

無常乃報を観するに毎一称の益ハとし

いまし身ならぬの浮生をとる物は改上人

のりをつたへすまして

二ホ法親王道添

うつしをいとたのもしき月の日をうさい蓮となる世よ

揚枝乃音とそ人をしるみきろふ

なりき世に蓮はいそう乃中さ国蓮すう枝よかりなさりせハ

小弁

上覚上人のりとうり乃ろ中ハ乃ろ

ぬ浮世ハ夢乃ゆめ乃なかさとやさ

ゆ乃ゆめ

言弁上人

ゆ乃ゆめ乃蓮と夢そとさ言ゆ乃ゆめ乃ゆめ乃ゆめ

前中納言定嗣卿又ハ法名ハ金

光明寺殿懺悔ホとゝゝ

僧正實瑜

浦出ホ今諸人ハ流謂如来日乃心とゝ

法印經賢

弘也百そ乃ゆめそさりけり河

法九条前関白

西の海みちもゝ乃ゆめ

正治百首歌よみ侍りける

賀茂季保

ほとゝぎすなをしたのもしおもふこゝろの花のたよりにて
世のうきなかの夢のさめて功徳つむ導師よ
ゆふかけてうつし向ふんこゝろをしるべ
なけれ

権僧正永縁

みなかみのいはこす波やまをすぎ谷の新もみ
ぢ

みみ人しらず

ちるすゑのこゝろ見えぬ花の色に昔ふるの新もみぢ
地獄乃絵よ三そのの山を出ぬ人を思へ

なれてこそ人のうかるこゝろをみく

二條院宣旨

つゆ時にはなれて知るこゝろなくこゆるこそ山の
新元百首歌ふ　前中納言為相

てらすあるよはねるこゝろ彼しの心とやとる山の月雲
浄土三部経かきて奉安して供養の
ふ権中納言具行いまこゝろ侍ぬ後生まを
しらぬ人の日つゝ書　妙阿法師

山のそれ人日をそこを祝ふるを和ふんとこゝろをみ
返し

権中納言具行

出家入道といそ[illegible]
元亨二年四月亀山殿にて[illegible]
つゝて五十[illegible]

権僧正道我

廣澤の[illegible]
傳法灌頂の[illegible]
て人[illegible]

権僧正道助

[illegible]
麻苑院入道前[illegible]

[illegible]
法[illegible]
前大納言為世遠忌[illegible]
[illegible]

前大僧正道元寺

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

お大納言為定

今[illegible]
同[illegible]心と
[illegible]

権律師玄覺

[illegible]
妙音[illegible]

望月[illegible]

あらしふきしりぞく山の中にあるなる法はてそうろう
新恵舎利会とてこなひけり次に法文の事
よみきる中に　前大僧正道慶
昔ゆ鷲ゆ嶺の雲ゆ出法の音にみるぞ
二条と　明魏法師
ふるはしとてとまりぬる法の水深き所を清きながれを
郷貴人の成　よきと人（三）次
なりあつる花も紅葉も散そへんの色そ今はむかさ
餓鬼界　お大僧正道玄
ほとやとの世に浦よ立ちれ物ものそれ

前大僧正果守
さとりえぬの園はてくそ苔小陰さ重る迷ひ消れ
中納言為房卿忌に結縁経の奥書
めけりふ無示訳不乃心と　権大納言公明
さとりと何ぞ久稀の苔小陰さ重る迷ひ消れ
同時信解品と　仮字の虎寧相典侍
ふりかく心乃蕊とりひそ迷ひ程の園ぬるけ
天教方れ中に　よみ人しらす
世とぬるのさとり都ぬるとぬ人のおさそ無

高聖ふるみ(給)をうしなわんかたよりてをり
をりすゝ念誦をもてこれをいのる
元可法師
高聖ゆうさ世ゆ為と云へとその嘆と松乃おもふ
春福門院より拾不六時殿乃給ふ西へ天
ゆゑあてまつりつさしよ給ふふあ無ふ
定ちりいつゝ月てほのふ天乃樂とさて
皇太后宮大夫俊成
ちのゝ雲おゝるゝ乃風れねとこけ乃ゆ法かり
身雖遠離心不遠離とふゝ
寂蓮法師
身はあゝと思て出ぬ乃ゝ月れいんゝとそむきやいとゝ
法法性寺入道前関白太政大臣家百首
よ五種乃書写の心を
正二位家隆
書ふす法乃ゆゝ樂れんのあゝとすゝとこへて
月ちす
勝定院殿太政大臣
ちゝ乃ゝこひ法ゝ者て鶯くゆ法ふと迷ひと
ちゝ乃ゝ者まれ

新續古今和歌集巻第九

離別歌

とゝまらぬものゝ[illegible]けうかゝるを
たゝせゝみてゝらふれたるをつゝ
けり　藤原雅經朝臣

[illegible]よりあつまりとゝまるを[illegible]
前[illegible]ゝけり時

九條右大臣

[illegible]
二條太皇太后宮[illegible]

つゝまゝてとゝまりたるを[illegible]
のゝこゝゝゝゝゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]　[illegible]

[illegible]
別の心を　前大納言隆房

別のこゝゝゝ[illegible]
權中納言基綱卿[illegible]
[illegible]
[illegible]

源俊頼朝臣

ゆきまよいさまよひ松原をうりせいかの命をなげてまつ西
大納言經信卿大宰帥なりて籠居へまうゐ
ゆかつりけり　周防内侍
都にもいとゝ人松原ゆきあはぬ袖にせきもとゞまる
あひ思ひ者わすれぬのみちをたゞ人
ゆくふ月乃つゆ袖にうれはして
ちぎりみ者ふ　實教法師
思ひ今宵の月ゆゑ誰と雲ゐのうへにあかすとも
古方乃袖をそしらみけり何なふ別のと
いふとも　好忠法師

擬宣旨の月ゆゑうすい物乃別乃うへにうつるほ
別乃方の中に　權中納言雅綱
いとゝ山里立別れ雲ゐのうへ人雅ゆゑ
ゆきしゆゑうへまうらけり女ゆ餞し物
ゆゑ　前大納言實宣
打ゆ思ふや者ゆ立ゆゑひて志ゝぬ涙ちとなる月き
堀河院の御時百首ゆ
袖乃内親王郁芳門院
涙乃いとゝ志ゝぬ別ちふゆゑ扇のゆゑとなのむ
去日社ゆ生者ゆ百ゆゑゆ中に別と

皇太后宮大夫俊成

別てふことはつらきれ旅衣立るまては日数へぬとも
恋しくはかはりゆかんとその人へかへに

やつりしける　寂身法師

此山を恋ひ家まてかへらん人はしくそのこそ志らて
逢し

よみ人志らす

海山の浪のへたてはすむともたのむ心はなしかはるて

文永二年七月白河殿にて人々題をさくりて
七百首哥つかうまつりけるに餞別
といふことを

藤原資有

たひ衣かさね道としてふまにたむけも月を契さふ

旅中思女といへる心をよみ侍りける

従二位行能

なからへん身はなきさとも白浪の立かへるへき九重をね

成尋法師もろこしにまかりわたるとてふ
なん毎おし侍りけるに文をおくりたりし
より日ころへて京よりていひけれは

成尋法師母

我袖よりも涙とゝめて舟のとゝに濱やりけん
おひらんとおもふにかひぬれと我やなりにけむかしなからん

河内よりて見給けるの乃ちんと
けり時さくさきくさくさなれるものと
いり考る也とに　山口重如

ふかき恋ふるあるこの撫子
たちりのくるふ京ちとて重り考る男より
こひつさ給けるあすのりちんと
けり時ちあるいりゆまいてつさちはは
いひるに　偶偶あこ

ちあるいりのくふ考るなる命ちふのひまを思
陰程大事那乗ちまけそてちけ

時河ちりのくをちりはまりて毒潰る
るかくちるふすちちてけるそ

津守國基

鴻ちにさしまそをみるへさしまそてちる義寡ち
十月ちりの女の遠さ面へまちりけふ
梅則長

あふとを何よりのん神去月ちの俺をわまあふ
累法院信よれりまけり時百ちる
てちりけふ　前参議教長
思ちを嘘ちの別ちに言を行まいて嘘てき

なかもちの常法よりなりて下給るふぢ
そくつるすとそおひよむすひつを給り
後頼朝臣

なそもろ〳〵別そめ老人ひとりのかまの常のしめの
久安百首ふ　参議親隆

ゆとともひとりらぬ月をもれたりさゝふの別のとり
ろさはしくてくらり給けり時人のわさとて
をこせ給けるとし

友原長能

わろとをゆるもあるに実説〳〵本下露ハ公とを給
一を

泉河院御所河百首ふ　神祇伯顕仲

ろうそみゝ〳〵さ月ともたのまれをもとの別の長のかゝ
ゆ〳〵しらす

あをとをゝぬ月とたのむそあやう老れ塔と思別れも
安和の院四条

友原助信朝臣給中守よ数〳〵てり
けるふ兼香殿しりあるさあるとを給世
をろ〳〵さこ〳〵めて

冷泉院御製

我よりゝぬ人のあむとるあさあれそ形そ世ふるとゝ道

[illegible]

友京助信親卿

[illegible]

西院皇后宮上東門院と申す一所にて

[illegible]せ給けるかうせ給よりいさゝか

うらとなりてまゐらせ給しとも程

つゝきゝれうふかいふせよりさきたて

なりらんと申はを給しうけ出はべ

ふ

上東門院

いとゝ浮世の外ふるまひぬ身と立ゐるうらとゝ思ふ

武部命婦

[illegible]ふ下者うけ扇とゝ

[illegible]

皇后宮下野

[illegible]雲井の月とあはさて

伊勢より給はりに女郎花とうへあり

けるふ京へ向のうり給はりて

肅子内親王

[illegible]

[illegible]

新續古今和歌集卷第十

羇旅哥

寶治二年百首哥よみてさつりけるとき

前大納言為氏

旅人の嘆いそくれぬ宮ぢかく
ねぐらやのこりむらん

彩玉津島社二十首哥に

武部ぬ邪首親王

旅の夕べを告ぐる旅人の角笛
を別れとやなるらん

紀盛家

秋とあてこゆる関路の鳥はやい
そくふつまで音ぢかうん

百首哥よみてさつりし時

前右衛門督為盛

里ぢかき中にとりて秋とうらにいそく旅人

寛治元年九月十三夜紀伊守十首哥

合よ

紀馬服院下野

秋萩の一本宿るか松の小河と嵐の声ぞふく

彩玉津島社二十首哥

藤原清輔

ふりそ秋もやうやく暮れぬ旅人の
去る方は遠き都の山のこる浪は

去る方は旅人そ月とみ行く

和泉式部

去乃秋ハ月ハ雨ともろともに野辺見し宿そ遠さ
思しらす

恵慶法師

春とおきく旅の枕ににほふらむ草のもわきて涼しきを有る
波のりし後の時雨ふるさいそねに志かの
あけつゝあかて

前大僧正道昭

雲ふかき山乃雲やたなひくらん岩ねよりたつ苔の下水
旅宿のくらくもますせ侍けり

後小松院御製

かりそめにすゝきかれ野の秋ふかく雲もさやけき露の枕に

百首歌たてまつりし時

覚法親王

やとれ月露分さゝの旅衣もちし袖のしほくにに
おもひしりて月かとそ見るみを
物を

登蓮法師

古里を思ひ出りつゝ起ふしにひとりよる月の
影

羈中送日といふことを

なへての月数こそいふらん旅の日数をかそへつゝ
思しらす

源時清

こえくらし山のかなたにむすひける旅よふる時雨

名残思ふにつけて

みみんさぶ

こひやうの波のうへや河内なん都のうれ山のうへの雲

熊野より海をへてけうたふく

増基法師

いとしく欲しきせとの月猿乃そをふるの河霧

弘安元年百首の内

花山院前内大臣

猿谷のうへにひろき雲の海の海より遠

猿方の中に

祖月法師

ふるさとの山もまやはらひよ雲ていとふかぬ月の光

平氏教

うつみの雲れいろうそれるん之すす月日をたのそ

因照法師

彩未を彩さるまるる山のれ雲乃いろとあるとこ之ま

月しらす

素暹法師

ふしあるとこひ峯にさそれい彩未を山ちぬ乃り

建保二年八月内裏百首合より秋猿

大納言通具

秋の神をうらみあるとの峰山霧ふるして

正治二年百首歌奉

侍従藤原朝臣

時しもあれ雲はるるこよひの月はかくしも秋をてらすらん

賀茂社よりあそばしてさつかはしける中に

権中納言宗継

今まてふるあめの雲とあつまる日数よそへて移やてらん

源頼豊

雨中の月

雲もなをうつりてとまるさとの月

月霸中友とふるさとの雅縁

月ふるそみたれそうるはしてあふんとあめの前の花と

家ふるく百そとうつりみはけるふ雨と

海住僧正前宮内卿

雨はらす

うねとう思はさやの梅に我かをとうつ

源光行

とまりきをんとあるもあるはしの雨のやうに

賀茂重久

閑雨と

あふんをまさる白河の関越て林風ふくと雨ふつてま

平光俊

二品親王覚誉家五十首歌に
後八条入道前内大臣
清見かた霞て夕しほのみちぬらし磯人
百首歌奉りし時
権大納言実量
播夜の河白浪とよそにこそ秋そ越ゆる山の雲山
貞和二年百首歌奉りけるに
前中納言雅孝
重やらそ日影ハ猶も遠山のふもとやかすむ道
入道前一品親王尊円
暮のめ山のよそめに見し雲ハ重なる人の
嘉元二年伏見院に三十首歌めされ
けるついてに羇中眺といふことをよませ給
ける
後伏見院御製
志ほ木のあらしの末を霧にさそひ宿とふ山の曙そさひき
円光院入道前関白太政大臣
み山ちや夕こえくれハ星みえてこゝろにのこる眺也
文保百首歌奉り
弾正尹忠房親王
松浦山夕こえくれハ重なる星をなかめて雲の端の眺め

霜枝乃ふゆを
越てまそ花やはるの里をさく山の雪乃さもむろ
たゝ長留士乃人作んとそおつまふ下作
時はるゝ〳〵ふ所なくてうしに字津の山とこえ
伯とそ春後雅世ふ合〳〵昔ハゆあう
うつゝ乃山とゝみけるとゝ
指中納言雅世
昔ふむとゝ乃うつゝ乃山こえそ春ふ昔ふ下乃
家とそ方合〳〵伯けるゝ時昔と
住京極殿お左殿

撰名院入道内大臣

うつゝ乃山ゝ昔の跡ふりて昔ふ桂業ふ秋ふ世ふ
影〳〵ふ
清原宗親
都やとつゝ廣乃ん稀夜日と夕昔ふ乃山こえ
寒沼百ゝ方ふ角そふりける時
正三位雅朝
是月の山ふ年乃家とゝ方ゝ方ゝ稀乃家ふ
元久二年六月和歌所百首合ふ山伯秋
影
出家法師
うゝ方ゝ方ゝ方ゝ昔ふ雲被ふ乃乃ゆゝ
元亨元年八月十五夜内裏方合り

寄月旅　　前大納言實教

萬葉集の雲に隠れる月をこゆる景色けしき
正治百首に寄月恋

参議雅經

なつかしの山の中山ゆくゝて月より外の旅人
守覺法親王家歌合に寄月

従二位家隆

うつろふ山月ふりぬる花の色に春ぞ過ぎぬる風の音
寛治百首に寄月恋

お大納言為氏

昔妻恋のさゝやき家の内に松ふる雨と音ずれ
文保百首に寄月

法印定為

あつまぢをやうしこゝろの月ぞ残る都をこゆる
たゝ信よ事世修一新勅撰社二十首

ちよ羇旅

権大僧都覚巻

茅花ちる原のゆふ雲ゆすれば都忘れも
紀一らす

従二位雅家

行末と茅花よいそけとも形ゆくさきに雲の茅
前大僧正異守

いふ所にて都の方をみまゝに法華経を
　　瑞禅法師
分院聖人の法花経を信ずる神の法味
　　源家清
独り孤山の法花経をよむ色つゝ初の聖人の秋風
　　よる人〳〵なす
むかしの分をたゝ思ひ出ん法花経を
　　延文二年百ヶ日
　　前大納言為定
武蔵殿とゝもに分て限なき法花経をよ

霸中送日とゝもに
　　成忠寺開白おなじ所
ゝゝとゝ人いひて東海の中に猿乃見聞
　　弘安百ヶ年ゝ
　　坂東滅院大納言典侍
　　猿ヶ中に
　　後野美入道おなじ所
　　法市義寶
四人ゆゝ花をもとり経見て法花経をよ

西行二年百首歌よみてまゐらせける時

前中納言定家

草枕久しくなれぬ旅の空みしかやどりの秋の月

寛治二年三月社頭合に　摂津守國平

草枕ゆめもあはれぬ旅の空なれぬる月を友にしてなれぬる

元亨三年三月春日御社歌合に　摂津守

て七首首尾にまゐりけるに羇中

旅とてふことをよめる世阿弥

後宇多院御製

雲ゐ庭あらし入あれぬる

猿ゐ中に　前中納言公雄

越山ちかき里ちかく成ぬ

後宇多院御製

越山ちかき里ちかく成ぬ

中納言為房

いとゞ思ふ作り時

けふ見れば山ぬしやいかゝ

八橋と物人とひみやこ

おもはんとてうのうとけつふあをそうを
しをあはりて仏者ちにかるしのん
ねうはうふみてはけもいあるつさあ門とて

慈光法師

ちるしめや散と猿よりるそ移あつまちにと角心を

也一

偶偶作歌

東海よ美うしんこ年とも我も彩のうさをあうめん

井をえ乃山をこゆとて

道命法師

なうをいうの波うりとさえて水をの山とをふこ西ふ

鹿苑院入道前太政大臣家百首に寄ふ

猿宿夏とふことを

権大僧都尭孝

第枕ひはよみ所ふ乃人いうなう夏ふ孝ふ

羇中述懐

指中納言云々

散ふ聖へのう庵ふ猿ふこれや浮世の家ふ

二月法親王覚叡家五十首ふ

法印経賢

ふるさと秋ふ出ー伏の月よ角ちそふ猿の声

猿ふ中ふ

度會行忠

接待をその花園家にて神よりて月の新式
彩しらす　前中納言定家
約束むなしき岩木なれども越えて人をこそ思ふ情は
西二位季経
義なき家嫁にて乃接待仕てこそ神よ賜ふも
お伽草賞作
星をさすなれ八幡も力の為山路の月はいつ見ぬ
羇中述懐　藤原為家朝臣
力の為の蓬の蔭乃旅宿を長よ思ふ旅の人
弘安元年百首奇ふ
太御門入道太政大臣
おさまれてはなとやとう為れはを雪ふ山とそ接人
彩しらす　よみ人不知
あへ乃浦なれもむ石ふ浪のまに〳〵山は都なる
月前接りを　中務宮親王
あるれ人の併月よりて家なれすまれ〳〵
家ふく百そ方うみ結けるふ
書院院結た大臣
うねとうなれ作京うさふをたてやと秋月前さん

猿丸大夫

法印 祐賢

月を形見宿とふ新勅撰の第八枕詞家にて題

旅宿秋月とふことを

大納言俊信

猿ねとる声乃山風をそみ河をはやみ岩なる松乃

海路と

二品法親王覚蓮

こゝ乃へをはらん乃みな瀬乃松とこゆる白波

新元百首にてさりけり河おもゝ

ゝと

法印定為

あゝ海ゆりうらにてこゆる船のやへ乃雲

弘長元年百首にてさりけるふ

前大納言為家

羽衣雲破乃浪乃うへ乃月を形見とおもふ新てゝ

信者社よまゝてゝ人給けり

祝部成仲

信者とさゝ乃ゝ海をいろ乃浪乃あちらこちらん

文保百首にてさりけるとまりを考河

中宮大夫二条為世

海とまりあゝ乃浪乃枕をみ付て那ゝ

信法性寺入道前関白家百首にて月猿

の心を　　　　源仲綱

芦やろこれあすらしの蘆のかりねも寝られて

旅泊重夜といふ心を

　　　　正三位義重

やすらふ舟のみなとのさゝなみも浪よりて来てよなよな

ぞしらず　　とま人ありし浪

うきねして聞けば芦やの浦にもうらをかけて思ひ宿　泊

守覚法親王家五十首歌に

　　　　大蔵卿有家

浪のうへの海の波の梶枕心してふけ風への浦せ

海邊旅宿といふ事を

　　　　隆信朝臣

ちどりなくよはのうら風心せよ都恋しき

旅の仮寝に

新續古今和歌集卷第十一

憲方一

前參議經盛家にて方合し侍りける時

藤原清輔朝臣

恋ふる中に

秋恋はあまたゝびの下もえて海士のもしほ草かき

屋の社よりあそさうし方乃中ふ

雅永朝臣

初恋を

あてそもの草はゝ思ひのやゝ乃夕煙やそ陸奥ふ

物ゝそあけくれ人のとゝろ乃ゝ物思

ふなくいひけゝ思ひに

ゝこ

いふ事ふ乃ゝ物とゝ思ふ人ふ知ゝもらぬそ我ゝ思ふ

初恋の心を詠侍りける

後小松院御製

思ひいる海乃浪乃ゝ乃ゝ乃ゝをしはせさあ乃袖乃ぬ乃ぬ

千五百番方合り

正三位季能

月ふ乃ゝ乃ゝ乃ゝ物とゝ思ふ乃ゝ乃ゝ乃ゝ袖乃ゝ

永和百首詠よ

後押小路前内大臣

ゝ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ乃初恋乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

後法性寺入道前関白太政大臣

西之住侍家

きゝそめし君をみあきの月ふかし第四きりつゝ知るそあはれ

文保百首之内

ゆくそらもなつかしきかな

前権僧正雲雅

いふせんかの山の松の初時雨なつかしきかな

初恋の心を

ひとしれぬ松の下葉の初時雨たゝ一人のみぬれん

お按政大臣

なひかすいふせんとゝ雨入雲のはつかしの姿

前大納言俊定

つもりてやこゝろの海の梅さに思ひあてをえそ

石清水社の百首中に

梅察使五保

乱れ芦の初のこゝ海のやうなる波に沢

梅のひとりは女なりとゝ成けるかな

つゝ考

紫式部

色ふかしいろふかれと紫乃一りとゆへよしのゝ

忘れ草中に

源花政朝臣

一あるかとゝ乃小船ふる雨もそ忘れ草

貞和百首歌 竹林院前内大臣

ひさもりの色は一しほにくれゆくこの世の秋のあはれ

寛治百首歌 小寄月恋

法二位行家

さらぬだにかりのふせ三日月の宵ふかくとへと恋ふるこころ

恋 法蓮 女ともふんを

皇太后宮大夫俊成

知るやいかに宿の梢を吹ふきぬ風はつきてもふんを

百首歌 月前時雨

直明王

吹風もなにはありとも時ふれぬ月のうきをいとはんと

正治百首歌 三源入道太政大臣

なふるるの心はかりふるとりはんとうきをいとはん

鄙しらす 法二位俊長

あくがれて我身ふるさとうきをいとはんとはけ

延文百首歌 時雨恋

檀中納言為重

なをやいかに雲はかりふるとはいとはんとはけ

建長三年九月十三夜新撰六合百首

恋恋 出家入道前太政大臣

仰のねよ西方極楽せよ我下りえんひの無
意元中に　法印継芳
いふせん富士の麓よりあてはれむひよりこの煙
寛治百そ年　寧閑意
常盤井入道前太政大臣
人ありこの関実あれ訪もうを西方ひさあん
　　寧照法師
　　
みちのくの安乃実ひ人を浦を波をこうわ重ひ袖を
思意れんを　　仏法為敷
いひ出むこのふて世めてこ波ひりとりすゆをば

寧枕意を　　三昔為蓮
枕ひ人ひきぬりふ秋よりり秋をとまゆるす波よ
去意とふとを　　蓮生法師
知めや野人の為下りえて消あ高れひまを
建保元年百そ年　順徳院御製
ひのきすゆ風池のみくれは三なあやれねよ乱て
月を澄殿意十九そ年合よ夜意を
　　坂内前院御製
さてもいふ岩ひき法のあやあ第ひのやあふそ神歌

洞院摂政家百首歌に忍恋

正三位知家

はるとみえ人志れぬのゝ消侘ぬみまくれのあまのいさり火
われのみしる心と

六条院宣旨

むきさ眉のいとく月をとはまずは恋しさのうそ歎き　かこちかほ

題しらず

俊恵法師

うしとても思ひもはてぬ中の恋のつらさを人にしらせは

貞和百首歌奉りし時恋の歌
中に

左兵衛督直義

わくさはいまゝつまなさとみてぬより絶しかのゝ志るらん

文保百首歌に　弾正尹忠房親王

かはそ移せさらんをは波川袖まとおちぬは人やしらとて

寄舟恋といふことをよみ侍りける

今上御製

志るへなき霧の浦こく舟のゆくへにかよふ心ありとも

題しらず

明魏法師

志られしな思ふの山の初時雨心のおくの小深きもみち葉

前大僧正義運

われかこゝろならはいとなくてもいとゝ思ふ乃山の下荻

百首歌奉りし時寄山恋

前大僧正滿意

望まそかさ思ふの心ゆ時ゆ思いそ〻つ神のかさに
人よおりすう意と

皇太后宮大夫俊成

ま栄こう様の仇未となの〻せ〻わ〻人思ま思ま〻
意ゆ中に

中務卿宗尊親王

うむかよそゆ人めと行むそんの外小ま月日と
思意と

お大納言為氏

消め〻さ家こふ〻を思第ん〻う〻ゆ思ま〻の〻れい
返法性る入る前冥日百ま〻ま同心と

いそ〻の〻神ゆ人の神かまや思ゆの第小法ま〻家
ゆ〻ら

源惟貴

人めの〻思ゆ家の知さ寺神と世ま意ま乱ま〻
洞院摂政家百ま〻歌よ

為家信實朝臣

ひ〻〻ま又夜堅ふ行ま〻さゆ〻ゆ思ま家ま〻
家家意と

大納言為通

ま〻ひのま第ゆ家ま〻と世ま〻ゆ〻ゆ秘と〻ま〻ん
寄第思意と〻ま〻

みちさうの〜聖は落ちわたる月を見て

藤原秀衡

歌方は中ふ

津守國助

この山ちさき秋のさらしは霜ばかりを分て出るまれ雁とみるか

源頼益

ひかり出くかふとて雁とみるまでにいたもれ雁とこたへられ

建仁元年九月新撰方合ふ寄池恋

この池のみなそこふかむ苔のそれ下ゆく雁の行へ

如願法師

彩〜ふす

権僧正永縁

池のはふかき心とをもふとも思ひいるまでいそりえ

悲恋を

無名法師

みさひ江の底はるりの月をうつしてはふかへるふかきを

源在原恋ふるを

法印實快

はるかにそなりをのさはさやかのありを思ふ

千五百番方合ふ　後鳥羽院御製

芝刈の山下みれは月をうつしてこうれてのこ

後京極摂政前太政大臣

戒恋はまてこそ思へ人を思ふ

秋歌

秋歌ふ

寄菊恋を　　若節法師

流れ行く神代くすみをそ秋山の岩もとすゝぎねるかなを

後小松院御製

はつ小松代をへぬれとさかりて五十年ぶりに

ひろまりけるかな寄河恋を

成恵法親王前太宰帥

ちゝせゆくせをのまことをたてゝ見ん岩つ波のいとゞ

寄滝恋を

ふるとゝもなを絶ぬけり

後小松院御製

いはもりの世の中に出ぬ人なれは滝の流を神よ世ゝ

永和百首歌

前中納言實遠

そたのもしかりし仏の誓ひ也ゝ世ゝ恋よ為つ波

寶治百首歌

あさりけり

前大納言資季

見ぬ人の雲ぬしにあはぬ雲ぬしにあはぬ人ぞ

恋しらす

梅窓使資平

あさりやはさかぬ峯の白雲のたゝまぬ人よ思ひ消ぬ

百首歌めさしし次よ寄本恋を

今上御製

人恋ぬみ行の松風ぬ吹まそ行ぬ思ひ

文保百首歌

ぬそさりけり

[illegible]

前中納言有忠

二條院位にはべりしまうけの時百首うたよみて

大宰大弐重家

世をうぢ山の雲ふかく神ぢのみやゐにとまる人いとゞあはれ

源満祐

[illegible]

家百首よみ侍りし恋

院御前左大臣

世をひとつ三ゐのもとにうぬぼれぬ浪の音とぞ聞くすゑ

相国恋

坂小松院御製

世をすゑまでの家ゐ乱れわひ消ぬさゝの上に浪とぞまつ

[illegible]

信實朝臣

三つのみちとなりぬる神の下ぶしみるかの同じ

前参議行忠

世をすゑまでとなる神ぢ物とぞ聞くかの

一宮紀伊

人をうらみ恨るかの身をもてなすなかの海ぬ[illegible]

[illegible]

[illegible]

あひをふかまてそそこかめ海ふとせあてりこすもか
思こふこうよりけうへの間ようりて
りすとさこうえられてつりけう

大系之位

嵐ふかぬ木もりしとふとみを吹ら嵐ふ面ふ
人乃意ふよませけふ

前律師永觀

消ぬ露も波をよ出こふ後の琴ふれて
影ふす

法印實性

うふへこのふをこぬまふ思ふりそひりふ

龍山殿乃ふそ所ふ

お大納言為定

ひとりいつむふをみやせんをふふ神の波りさい
宮玉意とふふと

權大納言為遠

せさあ神ふりおちて紙の数ふをあふ波城宝
百ふふ面てまふ〳〵時同ふと

權中納言雅世

ふ〳〵ふとふふ神ふふ波のをや亂ん
建武元年八月十五日歌内裏ふそふへれの

ことし五十首歌よませ侍りける時寄月恋といふことを　　藤原永能

せきとめて月みるをりの涙さへおさふれは袖に影そやとれる

応安六年九月十三夜仙洞にて三首歌講せられけるに同心を　　前中納言基隆

誰故の袖の涙としらすはやとらむ月はいとはし

宝篋院贈左大臣家にて三首歌よみ侍りけるに　　法印経賢

月ともなにみつとも見し物思ふよはしめてそ今そしる

影しらす　　後宇多院宰相典侍

何故にあかすむかへる月ならん空にしてまたぬ袖のしるへと

洞院摂政家百首歌に忍恋を　　光明峯寺入道前摂政左大臣

恋衣色にはいてしとしのふとも正木のかつらくれなゐの時あるに

宝治百首歌に　　兵部卿隆親

おもひそめしものはかなしなあかぬ人の山ゐにしつこころも

恋歌中に　　藤原基任

白露もおりてふ山の下葉にもあらぬ歎はかれもやらまし

建保四年閏六月内裏歌合に

思ひあまりいつまでかなどと嘆きそへわが岩根の松の下

貞和百首奇十首

竹林院前内大臣

なかれいでしなれぬるかなわが涙思ふ人をつまでかき

文保百首奇四首

清水寺

清水寺なほ神の霊しるしあらばいかでか心をとどめん

思ふのみを

源光正

今はとて人の名残をなほ思ふ身をうらやまぬ人命なりけり

前大納言雅言

弘安百首奇に

墨のねは煙も雲もふりて消ぬるかの程をこそ

思ひ入る

源高国

柳の葉は色ぬれぬ程も猶わが身ひとつを思ふ秋かな

源義将朝臣

今はとて色ふかいろと年月の心をあはれ程ぞ思ふ

思ひ入る

平光俊

思ひ入るいろいろとなりてなれそめし我をつまでの

文保百首奇

後光明照院関白前太政大臣

つまでをとなりあはぬ人のゆくへとなりてあはれ思ふ人の命は

坂小松院にて人〻歌をさぐりて出すに
ちかうまつりける時 平忠久 恋しとふこと
と
入道太政大臣
神乃色とかりひとをしるやひとへに我のみ思ふ
あらしなりねば

新續古今和歌集巻第十二
恋歌二
五百番うたあはせ
皇太后宮大夫俊成女
思ふ人なをこゝろもとあはぬ神のいりそをしるかな
法性寺入道前関白太政大臣家百首
人忘れぬこゝろをしるべかりけるを
前中納言雅兼
思ひかねこゝろをしるべかりけるを
友則

[illegible]

不動寺と　前中納言定家

毎月[illegible]星[illegible]ひろひてみあれまつりける

永和百首より雪を

後香園院入道宰相前大僧

[illegible]中八雲のたえまの新玉のとしのはじめ

たる心を　紀後豊郷

吉野川をとに雪をとり袖ふるやせきのうつもれ

後京極摂政太政大臣百首より合雪

前大納言兼宗

[illegible]

寄鏡恋を　お参後雅有

[illegible]

寄鳥恋を　坂小松院御製

[illegible]

永和二年百首より見恋

儀同三司　資

[illegible]

[illegible]

津守國夏

月そへてさゝ世々の蛍の藻塩もみちあかぬ浦はこゝろかさらなむ

寄草恋　雅成親王

こゝろ海の浮き川塩あひよるゝ草の見えつゝそ遅はかなき

寄蘆恋　菅原秀茂

なのみもゝ人とみわまるの蘆草のまよひて恋ぬ日はなし

恋する中に　章義門院

あひてふ身のかりほの草のかまよふ涙もきるあかゝり

つまなりきゝへのりとに女郎花まよ□きて

藤原範永朝臣

一葉さふれてそゆる女郎花露けきのへよ袖はおもとも

嘉元百首歌よ不逢恋

前大僧正道玄

けふ迄やまつへきまでよむすひはるるわふりして蛍の摂兵

文永二年九月十三夜亀山殿歌合よた

なし心と　按察使資平

めくりあはん末をもしらすひとち常のとも身にあはぬ恋のすか

千五百番歌合に　後久我太政大臣

かくのつらにはせわかぬ玉緒も思てわたる月のなかひ式

源家長朝臣

藻ふ虫にわれから世をもちて吹く秋風のへをゆ夜の袖のうら浪

弘長二年（三ノ）閏霜百首歌奉献

従二位行家

あえなくやすみわたるかしてあまとまとわあるさま

洞院摂政家百首歌

皇太后宮大夫俊成女

乃月隠神のなりぬるあかつきの秋乃花芝桜

源家長朝臣

よとともに消ぬるひとをものかなしの煙乃後まさりけるや

弘安百首歌

権中納言雄

あるをもつゝぬ波の玉ものつゝにかやかるをひとしん

彰玉津島社三十首歌

権大僧都良春

いふかせんあるかの玉ものまきにかゝるようにてとしたい

貞和百首歌奉献

あるとしたりけるの時

入道殿一品親王為尊

あるとしたんとふ玉ものの後ぬりやたのゝなりた

寛治百首歌奉献

入道二品親王道助

金ちいるおもせるものさしり秋風つゝさゝ蓋ものの

彰一らす

まみ人さつす

うちなびくそのかぜにおくれ雲のそらゆく人をとどめて

借人名忘れたるを

前大納言為定

いふかせんうきをわすれてつきぬべきこころの人をとわばや

忘れぬ中に

中務卿宗尊親王

雲ゐゆく月をいかにとながめつる中そらにしきぬ

月をとどめ雲のかよひをとどめてうつる中れやの塵に

極遠房

歌つくりしに袖よりうつる清風の実れ法ゆりの花

大納言師氏

彩玉津嶋社二十首うち不逢恋

境宣上人

いつまでか開けぬよのゝ和歌とやてひろきこゝひろはま

延文二年百首うち寄月恋

前大納言公蔭

忘れ井はあるとは袖よりもをるゝいつゝよりはなれはてゝ

寛治百首うち寄月

正三位為継

うちなびくとは和歌と彩むすびてうつる中れやをとゝ

前大納言為氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

貞和百首歌よ　後勅撰の前内大臣

[illegible]

[illegible]　[illegible]社二十首

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　後照念院関白太政大臣

[illegible]　　三条元秀

月日の[illegible]

歌[illegible]月日の[illegible]

[illegible]　　後八条院入道太政大臣

[illegible]　　よみ人しらず

[illegible]

文保三年百首歌に

[illegible]　　後醍醐院御製

[illegible]

[illegible]　　[illegible]

はるかにとをもひよはまそをもるさ中に契をそめ
弘安百首の内の中に　　信二位為子
忘れぬ人はとゝはるゝすゝ世をそしのや思ふらん
貞和百首の内　　中宮大夫云宗母
はるかにあをそ世をとをてゝ為つまるさ松ゝ
忘れぬ中に　　清慎公
月の光あひそをそへん物思ふ涙ぬれぬ袖をつゝまん
　　高田女王

世をゝ人をとゝ世をこゝ世をあらんわすれをとゝすを
世をはるゝ考ゝ　　在原業平朝臣
人をとをわゝ忘るゝあらをゝ世をゝ秋をゝ
不変忘れを　　信二位為相
忘れぬ人はゝ世をゝ松をゝ忘れぬゝ
考ゝ　　清原村春
物々ふをゝ河をゝすまをゝ忘れぬ人はの世をゝ
前中納言為相卿
忘れの中に　　前参議雅有
これをとをまはゝやむをゝひあるゝ身をゝわゝ世をゝ

文永二年九月十三夜亀山殿ニ合

たゝせゐあはせんとゝられ雅房卿ゝ命ゐ給ふ

恋の心中に　　権中納言公雄

恋ゐ初ゐそめ侍ぬるよりなかの世とたのむ心ぼそさ

新玉津嶋社三十首ニ寄ル恋

恋ゐ人ゐ身をたゝかれ恨ゐとつまゐ人のこゝろ

身と思ひたえそうせしいつの世よりつまとゐりけむこひ　　宗久法師

前参議経盛家ニ合ゝ侍ける

恋ゐ初ゐそめむ恋とゐ人をみなを思ゐ

永和百首ニ寄ル　　権深心院前宮内卿

恋ゐそ恋ゐまさるゐ人のゐなら命ゐ

恋ゐ　　平渕行女

こひ恋ゐとひとゐ年月ゐ命ゐ人ゐ

恋ゐ初ゐそめるつゐ海の世ゐ恋ゐ初ゐそ　　平康頼

恋ゐ人ゐ身をたゝかれ　　藤原有高

[illegible]

[illegible]

平師氏

[illegible]

[illegible]

前大納言經継

寛治百首に不寄雲恋

[illegible]

山階入道前太政

[illegible]

[illegible]

後押小路前内大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源有房

[illegible]

[illegible]

明親法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中文大学文家房

[illegible]

たゝ大臣まゐりけり新玉津島社奉幣
よ行幸　たゝ幸　管實雅
つまとや行ゝとゝ化と海ゝ海ゝの為ゝに為ゝ神のいさゝ
為ゝ一心と　民部ゝ為明
あのまなのゝふつきそゝ紅中此ゝ白ゝ為ゝ神のゝ
法中慶運
人ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝたゝのむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
貞和百ゝ奉ゝ
〈道贈一品親王号
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

石清水社より[illegible]中に同心を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

住吉乃松いのちをひろさふらふ志きしまの道
前大僧正慈鎮
をもふ中に
世の繁乃ためとて乃ふかき乃ちきりを
建長二年三月廿九日
坂源院御歌
よ乃世乃ひとつ
重てとゝ乃ふれ乃ちきりを
別不逢恋とゝ乃ふるゝと
中原師卿朝臣
ゝ乃ちいとゝ乃ちを
千五百番乃合ふ
藤原隆信朝臣
ゆ乃ふかく乃ゝ
寄水恋
平親清
乃ゝ乃ちに乃ゝ乃ちを
藤原為家
恋百首乃よ
藤原為家朝臣
毎乃ゝ乃ちを
藤原為家朝臣家百首乃よ人乃恋
ふかくと
寂念法師
高野川いひもてすいさ乃ゝ乃ちを乃ゝ乃ちを思ひ乃ほ
おなし百首乃寄
洩始恋
後三位頼政

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

建仁元年十二月廿日百首歌奉行の事

[illegible]

[illegible]

後京極摂政太政大臣

[illegible]

建保三年六月内裏百首歌奉行の事

[illegible]

後三位保季卿

[illegible]

順徳院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

正三位成実

[illegible]

恋の中に　後鳥羽院御製

いつりはりやすらへやゆく末をなほうらへいそ

なりひあはせあ

新續古今和歌集巻第十三

恋の三

題不知　前参議為忠

[illegible]

恋の中に　源和氏

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

[illegible]　藤生法師

[illegible]

貞和二年百首歌奇題をよみけるに

後三条前関白

月をのみ待つとはなしに山の端に

あらぬ秋の夜の雲

しぐれ

いかばかりあはれまさるの秋の月

なれぬ一方合は宵風寒し

坂本雅院御歌

今はとて夢の秋かぜ吹ぬれば

寒き百夜の雨寒し

参議雅経

俺つくもえやはらぐ

弘長三年関雅百首歌

後三位重氏

わびぬれば身を秋の夜の月

影一方

梅の花八道関白

ぬぎ捨てし人の袖

百夜の夢のあとさらに

前内大臣

ぬぎ捨てし秋やゆるむ

ものの思ひ

ものの思ひ

雪の内院梅窓

前右大臣

有原雅親

藤原雅親朝臣

祝部成仲

清原宣為

有原直親

前権僧正雲雅

大宰大弐重家

権大納言満親

[illegible]

祝部成光

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

賀茂保憲女

[illegible]

源頼之朝臣

[illegible]

弘安百首寄月

花山院前内大臣

[illegible]

百首寄月恋

[illegible]

藤原為之朝臣

[illegible]

永和百首寄月

従一位宣子

[illegible]

契不来恋

大納言成道

[illegible]

文保三年百首寄月

従一位宣子

[illegible]

前中納言為相

[illegible]

中納言為藤

こゝの人のなくなりぬるをとまりて山ぶしの
歌の中に　俊恵法師
あるかの匠人をこゝにあつめて
物をつくらしめしかの世のことを思ひ出
人のこゝにあつまりて業をすゝめしを今の
世にもかなしき
三河内侍
ひとりのみ秋の歌をすゝめしかの世のことを
彩玉津島社二十首の歌より
　　藤原の法師

いまもなほ人々はかなくなりぬるを
あはれ〻年伏見院より時れ
なりしを　　法照念院関白左大臣
夏のなかばにひまをつくりて月をながめ
歌の中に　　前大納言忠良
あらさまなりしのあけの月の新しきを
秋夜長といふことを
　　梅乃中納言
なほ月の出るまの月出よりとりあへず人の新しきをみて
彩らす　　鎌倉右大臣

行人いとなむ物ゆへよもすがらきかせ出くれてさきをとりすがら
建保六年内裏方合の夜歌
前参議忠定
くさ葉の袖ゆくかぜすがらおもてけていく秋なれん
法宇房僧正十首歌ときに祈
逢恋
丹波忠守朝臣
世をいのりあるかぎりなくふかき中とぞ
あるべし心と
清原雅賢
行末の契をたゝぬめ縄をくりかへすこそ
入道一品親王彰助
寄関恋
契おきしいなかなるとこそきりかはるとも
法性寺入道前関白太政大臣家百
首歌 初逢恋
宮内卿
そのまゝすゝきのはらのかれをみよあひそめてうつろふ
後恵法師
逢ことの葉のこゝろ
文保百首歌
六條内大臣
葉ゆゑてあひそめうつろふ
後宮鶴院御歌
ゆかりまゝ世の中二十首

年けつふ逢恋を　権中納言雅縁

こゝろひゝそゝろさゝとしらつゆ三そゝとゝ中の下紙

永元百ゝ寸ゝあてまつゝせ給けゝ時

万秋門院

りゝすゝるよゝゝゆゝひゝとけゝそゝみゝを給ゝゝ髮ゝを給ゝゝ

権中納言雅縁ゝゝ申せ給けゝゝ小整法寺を

寸ゝよゝ逢恋　伯法乃敦

つゝまゝさゝに思ふけゝりゝを下紙ゝゝをてゝんゝむゝすゝれゝ

延文百ゝ寸ゝよゝ寄藻恋を

寶篋院殿左大臣

あゝ秋ゝ川ゝの下なゝるゝひゝとゝのなゝひゝくゝふ形ゝそゝひ給ゝ

初逢恋を　二条法親王覚尋

つゝまゝさゝと恨ゝゝられゝをゝうゝるゝ給ゝ来ゝゝたゝゝそゝゝるゝゝき

貞和百ゝ寸ゝ寸ふ　伯三条前内大臣

波川ゆゝ来ゝ形ゝむゝあゝせゝて命をゝうゝる神のゝゝゝみ

永和百ゝ寸ゝ前中に

源守法親王

逢恋ゝ秋ゝ川ゝあゝる神ゝよゝ形ゝ来ゝの髮ゝたゝゝまゝゝ神ゝゝやゝゝゝん

逢恋の心を　後押小路内大臣

逢夜ゝゝ恋ゝゝ恨ゝゝ人ゝゝ来ゝをゝゝゝうゝふ人ゝゝゝゝ

寄関恋

前参議雅有

河内国八幡の社にまうでたりける
百首の歌よみし時 恋心

たゝねする
玉名
立帰りみやこの方と思ふにも下紐のせぬ
夢ぞ
しらぬ

平貞國

あふ人はつゝみ侍りとて
恋元百首の内

贈従二位為子

なにはへてみをあひ人のまれ
契よりあふ命とをれ
恋字を侍りて人々もとさゝりて方々
ゆ

つれなき河原恋

惟宗光吉朝臣

恨をもみる志賀の浦波なれぬる
恋をしれ中ふ

坂上業房

あはとをふそをもふるの月は西にさけとこゝ
老山厳七百首の内

為冬朝臣

いつかうらをこゝ恋ふと
夢ぞ
しらぬ

清宣上人

後の世をやそこゝろひや契ほ
世をいとむこゝあまを今いえるん

いとひて行けるか

刑部卿頼輔

命をそふ後あへさうし
なる今はかりとそ
あ方恋といふすと

前参議教長

忍ぶ身をしのはしてこの
思ふことをとはすすす
思不逢恋とふことを

坂二條院御製

うむるよりあと絶はてはかりなる
思二世恋といふすと

鴨長明

我いとうむ世の関はあらしの道
洞院摂政太政大臣

正二位知家

ふるさとにあはぬ物とは
人乃なのことをとさしてこ
まりけるか歌別恋といふことを

坂光厳院御製

今更はいとむもつらし別れとは
後九条前内大臣家の歌合に

為京光後朝臣

あえて行ふてつきしたがわるる時よおつる命は

影しらす　　源俊氏

おりくにつけさと行よ忘れて今はたゝ忘れぬ別ぬん

新玉津島社二十首詠　　前大納言忠嗣

うれしそも身ふそひそたんてみかはさ別日神の月を

忘れぬ中に　　清原忠岳

おさまりし世の波の神はよてはまふさ和月を世

よみ人しらす

ゝぬ〳〵の神波よ新とあて月をわるて高はて

貞和百首　　お大納言公春

いそそめたりやあらんくいりてさわる風の月

影しらす　　清原澤弁

空にしんとひまふ〳〵分て名わ明ん

有原高花

月と雲と光と陽の別そとゝ嘶うたひさあん

勿〳〵良抜世朝に

別めたり行世ふたのむ命とうたう別ふねて

清守國夏

忘ふん別とうい欲しうい人い抜しさあ〳〵乃を

法門四恩とかゝれたる

前大納言為定

ふるさとの別とひゝく松の戸をおもはぬよゐの月ぞすさまじ

花園院法皇

かきくらす涙の雨の今は別の袖もみぬ

治仁王

別恋の心を

むつまじき月新しのふるさとの人の別

前大納言長雅卿

まゝてさゝやかそうりふをとゝ角

恨をこせて行けむ人よりもて

従二位雅平女

恋ゆゑ

源義将朝臣

ひとゝもむとゝ思ひ出ふるさとの別

小槻重遠

恋を形人に別といそゝ者ねさゝ哀嘆もれ

法印慶運

別ちとゝのこゝすゝやうて者おもふこゝ

定房法師

うゝてゝとゝ知りてゆゝ新しゆゝけ者ハ社とゝ法ゝ

和元百ゑ三月廿日の時曉別意

前中納言為相

吟ましぬ秋をとゝ[illegible]

千五百番歌合ふ　和陽門院越前

[illegible]

寛治二年百首歌寄枕恋

藤原隆祐卿

[illegible]

弘安元年百首歌中に恋のこゝ

お大納言為忠

[illegible]

過夢恋とゝ[illegible]

従二位雅家

[illegible]

千五百番歌合ふ　前大納言忠良

[illegible]

[illegible]

和氣義成朝臣

[illegible]

信宣法師

[illegible]

[illegible]　　[illegible]宗法師

[illegible]　　中務法

延文二年百[illegible]

[illegible]　　寶[illegible]院[illegible]大[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　澄覺法師母

[illegible]

前大納言為[illegible]家卿[illegible]滿遠路[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　源保[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　　宜秋門院丹後

[illegible]　　後二條家御

いつかをせめていふ歌のそたりあむるゝ海むくを書をかく

参議雅経

ちゝの契りとなりてやあん日まそ丸へりの夕家

建保二年七月内裏ゝ合小蹋中意と

いつくとをとゝまをせ給しけり

順徳院御製

命やいあるゝ乃契りのあるなさ為を

ゆくすゑぬ月と